

# 同族 *with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞

柘 植 美 波

## 1. はじめに

英語の語形成に conversion (転換) と呼ばれる語形成プロセスがある。転換とは、ある項目に接辞付加せず、他の項目に変える派生プロセスである。英語の転換は生産的プロセスとされ、主に名詞から動詞、動詞から名詞、形容詞から動詞、形容詞から名詞という 4 種類の転換が見られる。本稿では、名詞から動詞へ転換される denominal conversion verb (名詞由来転換動詞) に限定し、分析する。名詞由来転換動詞の中には、同族の *with* 付加詞をとることができ、例えば、(1) のような構文が見られる。

(1) a. The queen buttered her crumpet with margarine.

(Randall (2010: 102))

b. \*The queen buttered her crumpet with olive oil.

(Randall (2010: 102))

(1a) では、名詞由来転換動詞 *butter* と付加詞 *with margarine* は同族の関係にあり、文法的に正しい文である。一方、(1b) は動詞 *butter* と付加詞 *with olive oil* は同時に使うことができない。どんなタイプの名詞由来転換動詞が (1a) のような構文を作ることができるのだろうか。動詞の項については  $\theta$  基準によって説明できるが、 $\theta$  基準は (1) の前置詞句 *with margarine*, *with olive oil* のような付加詞には適用しないため、従来の研究では説明できない。どのような理論であれば、(1) のよ

共

うな文のコントラストを説明できるのだろうか。

この研究の目的は、同族 *with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞を分析し、どのような場合に (1) のような構文が成り立つのかを調査し、動詞の意味構造と統語構造の関係を分析することである。そして、同族の付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞の特徴を分析し、その特徴に基づいてさらに細かく分類する。

本稿の構成は以下の通りである。第2章では転換と名詞由来転換動詞について先行研究を紹介する。第3章では名詞由来転換動詞の分類を調査し、BNCで収集したデータを用いてRandall (2010)のLinking Theoryによる分析を検証し、第4章では結論を述べる。

## 2. 先行研究

第2章では転換と名詞由来転換動詞に関する先行研究を紹介する。まず2.1で、転換の派生方法に関する形態論的観点と統語論的観点を見ていく。2.2では、Adams (2001) と Clark and Clark (1979) による名詞由来転換動詞の意味的分類を概観する。2.3では、Levin (1993) による同族前置詞句をとる名詞由来転換動詞の分析を取り上げ、2.4では、Kiparsky (1997) の名詞由来転換動詞に関する意味的説明について見ていく。最後に2.5では、動詞の意味構造と統語構造の一致を主張している、Randall (2010) のLinking Theoryを使って、同族 *with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞の分析について見ていく。

### 2.1. 転換の派生方法

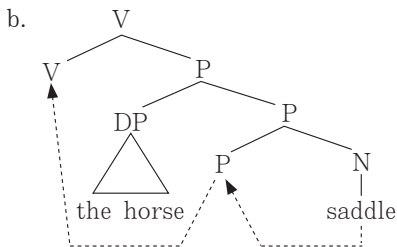
転換における派生方法について、形態論的観点、統語論的観点から議論されている。まず、形態論的な視点としてMarchand (1969), Allen (1978), Kiparsky (1982) の議論がある。彼らは転換をゼロ派生として分析している。例えば、派生動詞 *legalize* は形容詞 *legal* と接尾辞 *-ize* から成り立ち、*-ize* は ‘make’ という意味を持つ。この派生と同様、転換

動詞 *clean* は ‘make’ の意味を持つゼロ接辞が形容詞あるいは名詞 *clean* に付加することによって形成されると考えられる。Lieber (1992) も全ての派生プロセスは接辞付加であるという考えより、転換をゼロ派生として分析する。

しかし、これらとは対照的な考えも見られ、Plag (2003: 111-114) は「転換はゼロ派生でも接辞付加でもない」と考えた。例えば、動詞 *eel* は ‘to fish for eel’ と ‘to move ... like an eel’ の2通りの意味を持つ。-ate, -ize などの音形を持つ動詞派生の接辞は広範囲の意味を持つことができないため、転換動詞が何か接辞を持っているとは考え難いとした。その他の形態論的分析の一つとして、語彙分析がある。Lieber (2005: 421) は、転換は lexicon での relisting (再登録) のプロセスであると考えた。つまり、転換によって作られた語は mental lexicon の中で再記入されているということである。以上のように、転換をゼロ派生として分析するか否かについて、またゼロ派生の代案としてどのようなものが考えられるか議論が行われている。

次に、統語論的に転換の現象を捉える立場もある。Hale and Keyser (2002) は、統語的移動を用いて転換を分析している。例えば、(2a) は名詞由来転換動詞 *saddle* の例文であり、この文に当てはまる構造は (2b) のようになる。

(2) a. I saddled the horse. (Hale and Keyser (2002: 19))



(Hale and Keyser (2002: 18))

歯

(2b) の構造より、名詞 *saddle* はまず前置詞Pの空所に移動し、その後、Vに移動するという head movement (主要部移動) が見られる。このように、転換は形態論のプロセスではなく、文中で動詞の空所に *saddle* のような動詞を置いているという統語論のプロセスによって派生されていると考えられている<sup>1)</sup>。

このように、形態論または統語論的考えを用いて、転換は様々な理論で分析されているが、どんな方法で派生されているのかはまだ明らかではない。

## 2.2. 名詞由来転換動詞の意味的分類

2.1 で見てきた転換には、名詞から動詞へ転換されるという名詞由来転換動詞が見られる。名詞由来転換動詞は従来、様々な研究者によって意味的に分類されている。このセクションでは、Adams (2001) と Clark and Clark (1979) の分類を順次見ていく。

### 2.2.1. Adams (2001)

Adams (2001: 20-26) は名詞由来転換動詞を意味的に分析し、ornative (装備の), locative (場所), privative (欠性の) または ablative (奪格の), instrumental (道具の), resultative (結果の), performative (実行の) という6つの特徴に下位分類している。

1 つめの ornative の名詞由来転換動詞は常に他動詞であり、「ある意味で名詞の表すものを (誰かに・何かに) 持たせる」という意味を持つ。その基底名詞は theme (主題) に一致する。例えば、動詞 *blanket* (毛布を与える) や *oil* (油をさす) などがこのタイプに相当する。2 つめに、locative は「何かを基底名詞が表すものの中に入れる、あるいはその上に置く」というような意味を持ち、動詞 *bank* (銀行に金を預ける)、*bottle* (瓶に詰める) などがこのタイプに入る。

3 つめに、privative または ablative を見る。privative は元の名詞が

意味するものを取り除くというものであり、例えば動詞 *core*（芯を取り除く）や *dust*（ほこりを除く）がある。一方, ablative は元の名詞が意味するものから何かを取り除くという特徴を持ち、その例として動詞 *mine*（鉱山から石炭などを採掘する）がある。4 つめに, instrumental denominal verbs は「名詞が表すものを使う」という意味になる。このタイプの例として、動詞 *bicycle*（自転車で行く）や *handcuff*（手錠をかける）がある。

5 つめの resultative denominals は動詞が表す行為によってもたらされる変化や出現を示す。動詞 *cash*（現金に換える）や *powder*（粉にする）が resultative の例として挙げられている。最後に, performatives を見る。performative は名詞が表すものを実行するという意味の動詞を形成する。例えば、動詞 *boss*（上司のように振る舞う）や *pilot*（水先案内人をする）が performatives の一例として挙げられている。

以上のように、名詞由来転換動詞は意味的に大きく6つのパターンに分類される。

### 2.2.2. Clark and Clark (1979)

Clark and Clark (1979) は新聞、雑誌、先行研究などから1,300語以上の名詞由来転換動詞を集め、分析している。そして、innovative denominal verbs（刷新的名詞由来転換動詞）という辞書に載っていないような新語に焦点を当てている。Clark and Clark (1979) は先行研究を参考に、名詞由来転換動詞を Locatum（場所移動）、Location（場所）、Durative（継続相）、Agent（動作主）、Experiencer（経験者）、Goal（着点）、Source（起点）、Instrument（道具）、Miscellaneous（その他）というように大きく9種類に分けて分析している。本稿で分析する転換動詞は Locatum に相当するため、ここではその項目に注目し概観する。

Locatum とは、ある場所に名詞が移動するという意味を持つ名詞由来転換動詞を表す。例えば、(3a) のように動詞 *blanket* はその特徴に

三

値する。(3b) は元の名詞 *blanket* を使って言い換えたものである。

(3) a. Jane blanketed the bed. (Clark and Clark (1979: 769))

b. Jane did something to cause it to come about that [the bed had one or more blankets on it].

(Clark and Clark (1979: 769))

(3b) の角括弧で囲まれている節は、動詞 *blanket* の parent clause (元の節) を表す。*blanket* は parent clause では目的格にあたる。それゆえ、(3b) の解釈によると、(3a) は「John が毛布をベッドに載せた」という意味になる。元の名詞 *blanket* がベッドに移動しているというように、場所移動の名詞由来転換動詞は、元の名詞が転換動詞の目的語となり、ある場所に移動するという特徴を持つ。

Clark and Clark (1979: 770-771) は、Locatum Verbs を合計336語リストしている。List A はその一部である。上付きの+で印付けられているものは刷新語であることを示す。

#### List A Clark and Clark (1979) によるLocatum Verbs の分類

Covering					
Temporary	Permanent	Permanent solid	Viscous	Powdery	Metal
+blanket, carpet	paper, wallpaper, paint, wax, whitewash	roof, brick, tile, parquet, plaster, +turf, tarmac, asphalt, seed, forest, feather, panel, +plank	butter, grease, pomade, ink, perfume, oil, water	powder, rouge, flour, bread, sugar	chrome, silver

Individual Objects					
Dress	Animal paraphernalia	Symbols	Label	Decorations	Miscellaneous
+robe, +shawl, glove, +cloak, crown, +cap, veil	saddle, halter, muzzle, bridle, harness, yoke	zip-code graffiti	ticket, label, poster, tag	garland, sequin	crown, cap, string, feather

Condiments	Clothing Parts
spice, salt, pepper, sugar	buttonhole

(Clark and Clark (1979: 770-771))

List A より, Locatum Verbs を意味的に分析すると, Covering (覆うこと), Individual Objects (個体の物質), Condiments (香辛料), Clothing Parts (衣類のパーツ) という大きく 4 つのカテゴリーに分類することができる。そして, 元の名詞が表す物質の素材に着目すると, Covering と Individual Objects の 2 つのカテゴリーをさらに下位分類することができる。例えば, Covering に分類されている名詞由来転換動詞 *blanket* は「毛布で覆う」という意味を持つ。毛布で覆うという状況は一時的な出来事であり, この状態が永久に続くとは限らない。これにより, 動詞 *blanket* は Temporary (一時の) というカテゴリーに当てはまる。また, 名詞由来転換動詞 *wallpaper* の意味は「壁紙を張る」である。壁紙が張られている状況は比較的長く続き, 何度も壁紙を張り替えるということはめったに起こらない。したがって, 動詞 *wallpaper* は Permanent (永続性の) という下位分類に属することができる。その他にも, 転換動詞の元の名詞が示す物質の特徴を分析すると, 様々なラベルを付けることができる。

以上のように, Clark and Clark (1979) は名詞由来転換動詞を意味的に分析し, 細かく分類している。

### 2.3. 同族前置詞句をとる名詞由来転換動詞の分析

Levin (1993) は 3,000 語以上の英語の動詞を意味的に分類し, 動詞がどんなタイプの補部をとるのか, あるいはどんなクラスに分類されるのかを示している。その中で Levin (1993: 96-97, 120-121) は, 本稿で分析するタイプの名詞由来転換動詞を, Cognate Prepositional Phrase Construction (同族前置詞句構文) の *butter verbs* とみなしている。こ

と

の同族前置詞句はほとんどの場合、前置詞 *with* によって形成されている。この構文のタイプでは、名詞由来転換動詞の後に、その動詞と同じ意味の前置詞句が続いてはならないとされている。その構文をとる代表的な動詞の例として *butter* があるため、*butter verbs* と分類されている。*butter verbs* の構文は (4) のように例証されている。

- (4) a. Kelly buttered the bread.
- b. \*Kelly buttered the bread with butter.
- c. Kelly buttered the bread with unsalted butter.

(Levin (1993: 96))

動詞 *butter* は (4a) のように、前置詞句がなくとも文法的に正しい文となる。(4b) と (4c) は前置詞句をとる名詞由来転換動詞 *butter* の構文であるが、コントラストが見られる。(4b) のように、動詞 *butter* と完全に同じ形の名詞 *butter* が前置詞句内に現れると、文法的に正しい文にならない。一方、(4c) のように、*butter* と下位語関係にある名詞 *unsalted butter* を *with* 前置詞句として文末に置くと、文法的に正しい文とされる。(4c) のような構文を形成する動詞は、「同族前置詞句をとる名詞由来転換動詞 *butter verbs*」として分析されている。Levin (1993: 96-97, 120-121) はこのタイプに当てはまる名詞由来転換動詞の例として、その他に *asphalt*, *blanket*, *chrome* などを含めて、全部で109語列挙している。その詳細は後のセクション 3.1 で見ていく。

#### 2.4. Kiparsky (1997) の名詞由来転換動詞の分析

Kiparsky (1997) は名詞由来転換動詞を分析し、語彙意味論の側面に焦点を当てる。そして、主な動詞のクラスは統語部門よりも意味部門に関連があると主張している。その中で、「動詞の元になる名詞が、ある場所へ移動する」ということを示す *locatum verb* と「動詞の元になる名詞の場所へ何かが置かれる」という *location verb* を比較している。例えば、(5) のような文が見られる。



(5) a. Bill saddled the horse. (Kiparsky (1997: 473))

b. Bill corralled the horse. (Kiparsky (1997: 473))

(5a) は「鞍を馬の上に置いた」という意味になり、動詞 *saddle* は locatum verb として解釈される。一方、(5b) は「囲いの中に馬を入れた」という意味であるため、動詞 *corral* は location verb とみなされる。このような 2 つのタイプの比較を用いて、名詞由来転換動詞を分析している。

Kiparsky (1997: 481-484) は Bierwisch (1967) 等の枠組みを用いて、locatum verb と location verb のそれぞれが持つ、意味構造を修正している。Bierwisch は「語彙項目は Semantic Form で表わされ、語の意味と統語との関連性は Semantic Form から argument structure と event structure を投射する原理によって決定づけられる」と提案する。Kiparsky (1997) はこれに従い、「最も低い  $\theta$ -role のみ incorporate されることができる、すなわち、名詞由来転換動詞の元の名詞によって表わされる (Kiparsky (1997: 483))」と仮定する。これは、 $\theta$ -role の順序が意味の深さと関係があると示している。しかし、locatum と location の違いは argument structure 内において、動かされたものと場所の転換の問題にはならないため、2 つのタイプの動詞が持つ location の関係を Semantic Form で区別する。(5a) の動詞 *saddle* と (5b) の動詞 *corral* を Semantic Form で表すと (6a) と (6b) のようになる。

(6) a. locatum:  $\lambda z \lambda y \lambda x$

[CAUSE (x, (HAVE-ON (y, z))) & SADDLE (z)]

b. location:  $\lambda z \lambda y \lambda x$

[CAUSE (x, (BE-IN (y, z))) & CORRAL (z)]

(Kiparsky (1997: 483))

(6a) の HAVE-ON は possession, (6b) の BE-IN は location を示す。Kiparsky (1997) は (6) のように 2 つのタイプには意味的な違いが関連すると提案する。

また、次のような興味深いことが述べられている。locatum と

location を分析すると、元の名詞の意味が bleach（取り去る）されているものも見られる。bleach とは、元の名詞が前置詞句の中で使われないことを表す。例えば、(7) のような名詞由来転換動詞が見られる。

(7) a. to paint an inflamed throat with iodine

(Kiparsky (1997: 485))

b. to shelve a book on a windowsill (Kiparsky (1997: 485))

(7a) は「赤く腫れ上がった喉にヨードチンキを塗る」という意味で、動詞 *paint* は locatum である。一方、(7b) は「一冊の本を窓の下枠に置く」という意味であるため、動詞 *shelve* は location である。この 2 つのタイプどちらも、名詞由来転換動詞の元の名詞がそのまま前置詞句内で使われず、別の名詞が続いている。(7a) では、*with* 前置詞句内の名詞は *paint* ではなく、*iodine* である。(7b) も同様に、*on* 前置詞句内の名詞は *shelve* ではなく、*windowsill* である。このように、名詞由来転換動詞の後に置かれる前置詞句では、元の名詞の意味の度合いが弱まることもあり、この現象を bleaching と呼ぶ。

## 2.5. Randall (2010) の Linking Theory

Linking Theory では、意味構造がどのように統語構造に関連づけられるのかを示している。動詞が項や補部を決める方法をつかむために、この理論を取り上げる。以下、この理論に関する仮説を概観し、同族の *with* 付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞を例証する。

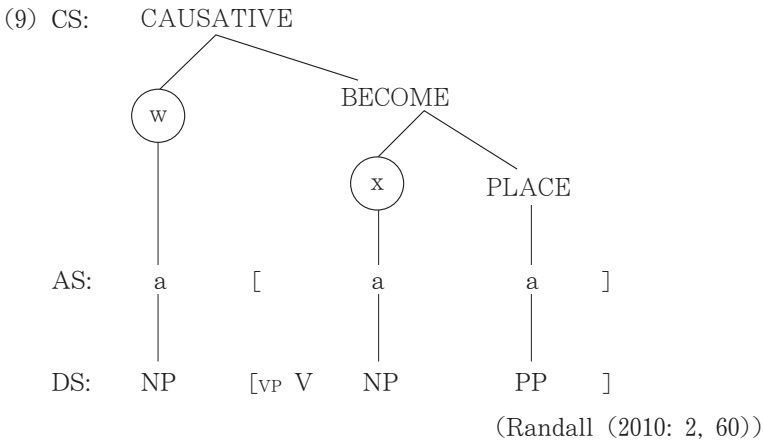
### 2.5.1. Isomorphic Linking Hypothesis

Randall (2010) は、語の意味と統語形の関係に焦点を当て、意味構造がどのように統語構造に関連付けられるのかを示すために、Linking Theory を用いる。この理論では、意味について表示する Conceptual Structure (CS)、動詞の項構造を表す Argument Structure (AS)、統語を示す D-structure (DS) の 3 つの表示を必要とする。この 3 つの表

示を用いて、動詞がどのようにして項や補部を決めるのかを図式化する。その3つのレベルをリンクさせるために、Randall (2010) は Isomorphic Linking Hypothesis (ILH) を定義する。ILHは「CSの連結節点は統語の最終節点と同一構造的に配置される」(Randall (2010: 1)) と定義されている。(8)の例を考えてみよう。

(8) Sue put her books into crates. (Randall (2010: 60))

NP *Sue* は agent であり, NP *her books* は theme であり, PP *into crates* は goal である。この文は ILH の原理の下, (9)のような構造を持つ。



CS内の項  $w$  は outer argument,  $x$  は innermost argument を示す。ASの  $a$  は argument (項) を表す。ASの中の角括弧の外側にある argument は external argument (外項), 角括弧の内側にある argument は internal argument (内項) である。(9)によると, outer argument  $w$  は ASの外項とリンクし, DSの主語の位置にある NP *Sue* とリンクする。一方, innermost argument  $x$  は ASの内項とリンクし, VPの中のNP *her books* とリンクする。CS内の PLACE argument は ASの 2番目の内項, そしてDSでVP内のPP *into crates* とリンクする。

突

従って、CS の構造は DS の構造と関連し、同じ配置構造を成す。ILH より、Randall (2010) は統語が意味的構造によって決められ、これらは同じ構造になると主張する。この理論を用いて、名詞由来転換動詞の構造がどのようになっているのかを見ていく。

### 2.5.2. 同族付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞

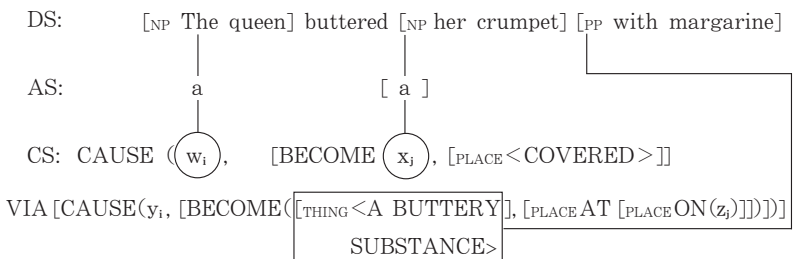
Randall (2010: 100-110) は、*butter* のような名詞由来転換動詞の lexical entry (語彙記載項目) が ILH の理論に従っていることを示している。例えば、(10) (= (1)) のような例がある。

(10) a. The queen buttered her crumpet with margarine.  
(Randall (2010: 102))

b. \*The queen buttered her crumpet with olive oil.  
(Randall (2010: 102))

(10a) のように、動詞 *butter* の後に付加詞 *with margarine* が続くことができるが、(10b) のように付加詞 *with olive oil* が続くとは文法的に正しくない文となる。この違いを  $\theta$ -criterion によって説明することができない。なぜならば、 $\theta$ -criterion は項に適用することはできるが、(10) のような付加詞に適用することができないからである。しかし、ILH ではこの違いを説明することができる。(10a) に関する lexical entry は (11) のようになる。

(11)



空

修飾句 VIA によって明記されている CS 内の選択制限<A BUTTERY SUBSTANCE>は、AS とリンクしないが、DS の PP *with margarine* とリンクする。CS 内の [THING <A BUTTERY SUBSTANCE>] は AS の項とリンクされず、implicit theme (潜在主題項) となる。しかし同要素は、*With-theme Adjunct Rule* により、付加詞として項を表すことができ、PP *with margarine* とリンクする<sup>2)</sup>。CS の意味構造は ‘The queen caused her crumpet to come to be covered by [causing a buttery substance to come to be on it].’ ということを表す。動詞 *butter* の意味表示に「バターのような物質」という選択制限があるため、(10b) のように *with olive oil* という付加詞が続くことができない。

以上のように、Linking Theory は語の語彙表示と意味表示を統語構造に関連づけている。述語の項の統語的配置は、その述語の lexical entry の中で表された配置によって決まる。

## 2.6. まとめ

転換とは、ある項目に接辞を付加せず、別の項目に変えるという派生プロセスである。これはゼロ派生である、あるいは lexicon の中で再登録されるプロセスであるという形態論的視点で分析されている。また統語論的観点によると、転換には主要部移動が見られると分析されることもでき、様々な観点で議論されている。名詞から動詞へ転換される名詞由来転換動詞は、Adams (2001) や Clark and Clark (1979) のような意味的分析によって分類されている。そして、Levin (1993) が示しているように、名詞由来転換動詞の中には同族前置詞句をとるものもある。様々な名詞由来転換動詞に関する分析や分類が挙げられている中で、Kiparsky (1997) は location と locatum タイプを比較した結果、これらの動詞の違いは意味構造に関連があると分析している。また、Kiparsky (1997) によると、名詞由来転換動詞の後に置かれる前置詞句  
は、元の名詞の意味の度合いが弱まるという bleaching が起こる場合

もある。そして、Randall (2010) は動詞の lexical entry 内で意味構造と統語構造は同じ配置を成すという Linking Theory を定義している。同族付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞の構造は、Randall (2010) の Linking Theory で証明することができる。

第3章では、この章で見てきた従来の分析により、同族付加詞をとる名詞由来転換動詞の特徴を証明できるのかどうかを検証していく。とりわけ、Kiparsky (1997) の bleaching と Randall (2010) の Linking Theory を扱う。

### 3. 提案

この章では、名詞由来転換動詞を分析し、どんな特徴によって同族の *with* 付加詞を持つことができる動詞を決めているのかを考える。まず 3.1 で、同族 *with* 付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞を意味的に下位分類する。3.2 では、大規模コーパス British National Corpus (BNC) で収集した同表現を分析し、従来の先行研究の分析が正しいのかどうかを考察する。そして、3.2 のデータ分析の結果、同族 *with* 付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞を新しく分類することができる。3.3 では、データ分析を基に考察した分類を提示する。最後に、BNC データ分析を使って、Randall (2010) の Linking Theory で示されている名詞由来転換動詞の lexical entry を修正する。

#### 3.1. 同族の付加詞を持つ名詞由来転換動詞の分類

2.3 で見たように、Levin (1993: 96-97, 120-121) は、本稿で分析している名詞由来転換動詞を cognate prepositional phrase construction の *butter verbs* として分類している。Levin (1993) はその分類に属する動詞を列挙しているだけで終わっているが、その分類で挙げられた動詞には何か共通点はないのだろうか。動詞の意味に注目し、その意味内容を基に動詞を下位分類することができる。Levin (1993) の同族の前

置詞句を持つ動詞の分類を参考に、筆者が分野別に細かく分類した結果が、List B である。

List B Levin (1993) の同族の前置詞句をとる名詞由来転換動詞を筆者が分野別に分類

fields	construction	cloth/costume	chemistry
verbs	asphalt, board, brick, fence, frame, groove, mulch, panel, parquet, patch, plank, putty, roof, shingle, shutter, slate, stucco, tarmac, thatch, tile, veneer, wallpaper, wax, whitewash	blanket, blindfold, cap, carpet, cloak, crown, diaper, garland, glove, heel, mantle, robe, sequin, shawl, shoe, slipcover, sole, veil	bronze, chrome, drug, fuel, nickel, oil <sup>+</sup> , pitch, plaster, poison, rosin, salve, silver, tar

fields	cooking	art/paper	equipment
verbs	bread, butter, flour, grease, leaven, oil <sup>+</sup> , pepper, powder, salt, spice, sugar, tassel, water	graffiti, ink, label, ornament, paper, poster, starch, tag, ticket	bridle, gag, halter, harness, leash, muzzle, saddle, yoke

fields	nature	handicraft	cosmetics	post
verbs	forest, gravel, sand, seed, sod, turf	buttonhole, sequin, string,	lipstick, rouge, perfume, pomade	postmark, zip-code

fields	the others
verbs	bait, caulk, cork, feather, polish, rut, stain, stopper, stress, sulphur, wreathe

同族付加詞を持つ名詞由来転換動詞は List B のように、大きく11の分野に分けることができる。とりわけ、「建築」や「布・衣類」、「化学」に関する分野が顕著である。また、「料理」に関する動詞も多く見られる。因みに、上付きの+で印付けられているのは、他の分野でも見られるという重複を表している。例えば、動詞 *oil* は chemistry と cooking の双方の分野で下位分類できる。ほとんどの動詞は、「何かを〜で覆う」「何かを〜に置く」または「何かを〜に付ける」という意味を持つ。

しかし、2.2.2 で触れた Clark and Clark (1979: 770-771) の List A

と比べると、分野はあまり関係がないと思われる。List Aでは、*Viscous* (粘着性の)、*Permanent* (耐久の)、*Powdery* (粉末状の) のような元の名詞が持つ意味特徴によって分類されている。例えば、料理に関する動詞 *spice* や *salt* は List A では *Condiment* (香辛料) として分類されるが、*butter* や *oil* のような動詞は *Viscous* (粘着性) として分類される。List A は *Covering* (覆うこと) のような広いラベルをさらに細かく分析し、動詞の元になる名詞が持つ性質の特徴によって分類され、狭いラベルを付けているという点では、List B よりも優れた分類表であると考えられる。しかし、全ての同族付加詞を持つ名詞由来転換動詞が List A で分類されているわけではない。また、List B で挙げられている動詞の中には List A では列挙されていないものもあるため、同族付加詞を持つ名詞由来転換動詞がどのように確定していくのかを今後考えていく。

### 3.2. データ分析

3.1 の List B で、同族付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞を列挙した。それらの動詞を British National Corpus (BNC) と呼ばれる 1 億語の大規模コーパスで検索した。その結果、*with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞の多くの例が収集できた。ここで集めた例文を分析し、従来の分析、特に Randall (2010) の Linking Theory が正しいかどうかを検証する。

BNC でいくつかの同族付加詞を持つ名詞由来転換動詞の例文を収集すると、同族 *with* 付加詞をとることができるタイプもあれば、同族の *with* 付加詞をとらないタイプの動詞が見られた。現時点で大きく 3 つのタイプに分けられる。ここでは、それぞれのタイプの特徴を順に見ていく。

まず 1 つめは、従来の先行研究の通り、名詞由来転換動詞の中には同族の *with* 付加詞を持つことができるものがある。代表的な例として (12) を取り上げる。



(12) Franca had indeed had those fantasies, and continued to have them, of how she would kill her husband, smashing his head with a hammer, plunging a carving knife into his side, drugging him with sleeping pills and suffocating him.

(BNC: APM)

Oxford English Dictionary (OED) によると、動詞 *drug* は ‘to pull forcibly, to drug (OED)’ (強制的に薬を飲ませる) という意味を持つ。この語義に従って、(12) の *drugging him with sleeping pills* は「薬を飲ませて眠らせる」と解釈される。付加詞 *with sleeping pills* は *drug* の下位語となり、同族の付加詞となる。したがって、従来分析されてきた、同族 *with* 付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞のタイプと一致する。本稿では、(12) のような同族の *with* 付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞のタイプをタイプ 1 と呼ぶ。

その他にもタイプ 1 として考えられる動詞は以下の通りである。

(13) Inside it had been converted to make a dozen study bedrooms with shared facilities and a self contained warden’s flat, painted a bland cream throughout and carpeted with the tough fiber matting that was a feature of all the student halls and houses.

(BNC: G03)

(14) As well as powdering herself with the same orange and blue skin-whitening powders which her mother and grandmother had used, our bride asked maids and foreign Arab friends to search out modern creams and perfumes to be tried and kept, tried and discarded.

(BNC: CDX)

(15) Donald Buttress’ solution was to tile the roof with ridged composition tiles of a greenish grey hue, which from below look remarkably similar to slates and blend very well with the stonework.

(BNC: AR9)

さ

(13) の動詞 *carpet* は OED によると, ‘to cover or spread with a carpet, to cover or strew as with a carpet (OED)’ という意味を持つ。付加詞 *with the tough fiber matting* の *matting* は *carpet* の同族語であるため, (13) のような動詞 *carpet* もタイプ 1 として分析できる。次に (14) の動詞 *powder* は, ‘to sprinkle or treat with powder, or something in the state of powder (OED)’ という意味がある。付加詞 *with the same orange and blue skin-whitening powders* (以下省略) は *powder* の同族 *with* 付加詞であるため, タイプ 1 に分けることができる。また, (15) の動詞 *tile* は OED によると, ‘to cover with tiles; to overlay (a floor or roof) or line (a wall, fire-place, etc.) with tiles’ という意味を持つ。動詞の後に同族の付加詞 *with ridged composition tiles of a greenish grey hue* が続くことができるため, タイプ 1 の動詞に当てはまる。

2 つめのタイプは, 同族の *with* 付加詞を持たず, 意味が拡張している名詞由来転換動詞である。この種の転換動詞は, *with* 付加詞が動詞の同族語になっているタイプ 1 とは違い, *with* 付加詞が動詞の同族語ではなく, 意味の拡張が見られる。(16) がその例である。

(16) It was academic anyway, for just then another ominous rumble of collapsing masonry shook the foundations, peppering him with flakes of plaster from the ceiling and driving home the fact that he was trapped, with no means of escape. (BNC: HJD)

OED によると, 動詞 *pepper* は ‘to sprinkle like pepper, to scatter in small particles (OED)’ (胡椒のようなものを撒く, 小さな粒を撒き散らす) という意味を持つ。(16) の *peppering him with flakes of plaster* は「彼に胡椒を撒くように, 漆喰を撒き散らす」という意味を表し, 動詞は同族の *with* 付加詞をとらない。これは, タイプ 1 で見られた動詞のタイプとは意味のずれがあり, 「胡椒を撒くように, 何かを撒く」と

いう意味の拡張が見られる。さらに、付加詞 *with flakes of plaster* には動詞の元の名詞 *pepper* が含まれず、*pepper* の意味が弱まっている。ここでは、Kiparsky (1997) が分析している bleaching が起こっていると考えられる。(16) の動詞 *pepper* のように、同族の *with* 付加詞を持たず、意味の拡張が見られる動詞をタイプ 2 として考える。

BNC でデータを収集した結果、タイプ 2 として分析できる名詞由来転換動詞が多く見られた。(17)-(21) にその例を挙げる。

(17) It is a formless landscape, usually thickly blanketed with smoke. (BNC: FAG)

(18) I'd blindfold you with a silken scarf and tie your wrists and ankles to the bedpost with silken ribbons. (BNC: FPB)

(19) I walk up a flight of steps, carpeted with discarded copies of give-away magazine called Ms. London, into Waterloo railway station. (BNC: A2L)

(20) In the breathy calm I was able to sit outside for supper, under a sky powdered with stars, limpid river sounds in the background, and a very proper glass of peaty, river-coloured liquid in hand. (BNC: CG1)

(21) The moon had been shining in, silvering everything with its ghostly light, when Roman had made love to her. (BNC: GUE)

(17) の動詞 *blanket* は OED によると、'to cover with or as with a blanket (OED)' (毛布で何かを覆う、毛布のようなもので何かを覆う) という意味を持つ。(17) は「毛布で覆うように、景色を霧で覆う」という意味の文である。付加詞 *with smoke* は動詞 *blanket* の同族ではない。そして、この付加詞に含まれる名詞 *smoke* は、動詞の元の名詞 *blanket* の意味を弱めていることから、(17) は Kiparsky (1997) の bleaching に当てはまる。これらの点により、転換動詞 *blanket* は同族

共

の *with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞のタイプとは意味のずれが生じ、「毛布で覆うように、何かで覆う」というように意味が拡張される。(18) も同様に意味のずれが見られる。動詞 *blindfold* は ‘to cover the eyes, esp. with a bondage (OED)’ という意味を持つ。(18) は「目隠し布で目隠しするように、絹のようなスカーフであなたを目隠しする」と解釈される。そして、前置詞句内の名詞 *scarf* は動詞の元の名詞 *blindfold* の意味を弱めているため、(18) は Kiparsky (1997) が示している *bleaching* の例となる。この点より、動詞 *blindfold* は同族の付加詞を持たず、意味の拡張が見られるというタイプ 2 に相当する。また、動詞 *carpet* は ‘to cover or spread with a carpet, to cover or strew as with a carpet (OED)’ という意味を持つため、(19) は「じゅうたんを敷くように、雑誌のコピーを広げる」という意味の文である。さらに動詞の元の名詞と *with* 付加詞内の名詞の関係に着目すると、付加詞の名詞 *magazine* が元の名詞 *carpet* の意味を弱めているため、*bleaching* が成り立つ。この点より、動詞 *carpet* にも意味の拡張が見られるため、(19) の表現はタイプ 2 の特徴を持つと考えられる。

そして、(20) の動詞 *powder* の意味は ‘to sprinkle or treat with powder, or something in the state of powder (OED)’ である。(20) では「粉をふりかけるように、空に星や川の音、川の色をした液体をふりかけて装飾する」ということが示されている。これにより、動詞 *powder* は同族ではない *with* 付加詞をとり、意味を拡張させているため、タイプ 2 として分類できる。*with* 付加詞に含まれている名詞は、動詞の元の名詞 *powder* の意味を弱めていることから、Kiparsky (1997) の *bleaching* の例として見られる。動詞 *silver* もタイプ 2 の例として考えられる。動詞 *silver* の意味は ‘to cover or plate with silver; to coat with silver-leaf; to provide with a backing of a silver-coloured material in order to make it reflective (OED)’ とあり、「銀で覆う、銀メッキする、銀色の物質の裏塗りをする」という意味である。(21) は

「銀で覆うように、全てのものを幽かな光で覆う」という意味内容であり、意味の拡張が見られる。Kiparsky (1997) の bleaching により、付加詞内の名詞 *light* は動詞の元の名詞 *silver* の意味を弱めている。これらの点から、動詞 *silver* もタイプ 2 の特徴を持つと考えられる。以上 (16)-(21) で見てきたように、同族の付加詞を持たず意味を拡張させるというタイプ 2 の名詞由来転換動詞が多く存在することがわかる。

最後に、もう 1 つの名詞由来転換動詞のタイプを取り上げる。これも意味の拡張が見られるが、タイプ 2 とは別の特徴を持つ。(22) がその一例である。

(22) The tie for that elder-statesman's occasion. Silvered with  
silver on heavy woven silk ... (BNC: ABS)

前の (21) で見たように、動詞 *silver* は 'to cover or plate with silver; to coat with silver-leaf; provide with a backing' という意味を持つ。したがって、(22) は「銀色の繊維でネクタイの裏塗をする」という意味を表す。(22) の付加詞 *with silver* は動詞 *silver* と共に起こっているが、(22) では、*with* の目的語 *silver* は本物の銀ではなく、銀のような繊維を示す。つまり、*with* の目的語が表すものは本来の名詞の意味ではなく、その名詞の素材を示し、従来と同族の付加詞を持つ名詞由来転換動詞の意味とのずれが生じる。本稿では、このような特徴を持つ動詞をタイプ 3 とみなす。

タイプ 3 の例として、(23) の文を考える。

(23) Already some of the trees were losing their leaves, carpet-  
ing fields and lanes with red-gold, bronze and copper.  
(BNC: HHA)

動詞 *carpet* は前の (19) で見たように、'to cover or spread with a carpet, to cover or strew as with a carpet (OED)' という意味を持つ。(23) は「落ち葉が赤金やブロンズ、銅で地面や小道を覆う」ということを示している。しかし、(23) の付加詞 *with red-gold, bronze and*

英

*copper* は本物の赤金やブロンズ、銅を表しているのではなく、「赤金色やブロンズ色、銅色で」という解釈になる。つまり、(23) は「(落ち葉の) 赤金色やブロンズ色、銅色で地面や小道を覆う」という意味になる。これより、(23) は *with* 付加詞が表す *red-gold, bronze and copper* は本来の名詞の意味「赤金、ブロンズ、銅」ではなく、「赤金色やブロンズ色、銅色の落ち葉」を示しているため、タイプ 3 として分析できる。

しかし、(23) はタイプ 2 の特徴を持つと考えることもできる。「じゅうたんを敷くように、赤金色やブロンズ色、銅色の落ち葉で地面や小道を覆う」という解釈もでき、タイプ 2 のような意味の拡張があるとも考えられる。これにより、(23) のような動詞 *carpet* はタイプ 2 とタイプ 3 のどちらの性質も持つ、中間のタイプであるように思われる。このように考えると、同族の *with* 付加詞をとることができる名詞由来転換動詞の中には、タイプ 1 とタイプ 2 の間、またはタイプ 2 とタイプ 3 の間に属するようなものもあると考えられる。このような特徴を持つタイプとして、他にどんな動詞があるのかを調査することは、今後の課題である。

以上のように、BNC で収集した例文を分析した結果、同族の *with* 付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞は、大きく 3 つのタイプに分けられるということが明らかである。タイプ 1 は、動詞 *drug, powder, tile* のように、同族の *with* 付加詞を持つことができる。また、タイプ 2 は動詞 *pepper, blindfold, carpet* のように同族の *with* 付加詞を持たず、意味の拡張が見られる。また、動詞 *silver* や *carpet* のように、*with* 付加詞が表すものは本来の名詞の意味ではなく、その名詞の素材を示し、従来の同族の付加詞を持つ名詞由来転換動詞の意味とはずれが生じるというタイプ 3 がある。また、(14) と (20) の *powder* のようにタイプ 1 とタイプ 2 の両方に属するものが見られた。さらに、タイプ 2 とタイプ 3 の両方に属するものもある。動詞 *carpet* は (13) と (19) と (23) の例文より、どのタイプにも当てはまる。このように、タイプが重複している動詞には、他にどのような動詞があるのかを次のセクションで見て

いく。

### 3.3. 同族 *with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞の分類の改訂

3.1の List B より、同族 *with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞は全部で109語ある。その109語中67語の転換動詞を BNC で検索し、例文を収集した。前の3.2で紹介した動詞以外に関しても、3.2と同様に例文を分析している。その例文分析を基に、筆者が調査した67語の名詞由来転換動詞をタイプ1, 2, 3に分類した。その結果を示したものが List C である。上付きの+はタイプの重複を表し、例えば、タイプ1とタイプ2の両方に属するというを示す。また、BNCで例文を検索したところ、名詞由来転換動詞として検索できなかったもの、そして、*with* 付加詞と共に起こる名詞由来転換動詞としての例文が出なかったものについてもここで挙げた。

List C BNC調査結果に基づく同族 *with* 付加詞をとる名詞由来転換動詞の分類

タイプ	動詞
タイプ1 (同族 <i>with</i> 付加詞を持つ)	bait, carpet <sup>+</sup> , drug, fence, frame <sup>+</sup> , grease, mulch, muzzle <sup>+</sup> , oil <sup>+</sup> , panel, patch <sup>+</sup> , powder <sup>+</sup> , roof <sup>+</sup> , rut, spice <sup>+</sup> , stopper, thatch, tile <sup>+</sup> , veneer, wallpaper, water <sup>+</sup>
タイプ2 (同族の <i>with</i> 付加詞を持たず、意味の拡張が見られる。)	blanket, blindfold, bread, bridle, buttonhole, caulk, carpet <sup>+</sup> , feather, frame <sup>+</sup> , fuel, gag, leaven, muzzle <sup>+</sup> , oil <sup>+</sup> , patch <sup>+</sup> , pepper, plaster, poison, powder <sup>+</sup> , roof <sup>+</sup> , saddle, salt, salve, shingle, silver <sup>+</sup> , slate, spice <sup>+</sup> , stucco, sugar, tile <sup>+</sup> , wax, whitewash, water <sup>+</sup>
タイプ3 ( <i>with</i> 付加詞の名詞が本来の意味ではなく、その名詞の素材を示す。)	carpet <sup>+</sup> , silver <sup>+</sup>
<i>with</i> 付加詞をとる例がBNCで見出されない動詞	asphalt, board, brick, butter, chrome, cork, flour, groove, halter, harness, leash, nickel, parquet, pitch, plank, putty, rosin, shutter, slipcover, tar, tarmac, tassel, yoke

List C より、調査した67語中、タイプ1の動詞が21語、タイプ2の動詞が33語、タイプ3の動詞が2語存在する。タイプ1のリストより、同族付加詞を持つ名詞由来転換動詞として考えられてきたものが多いため、従来の分析の通りとなっている。ところが、タイプ2を見ると、同族の付加詞を持たず、意味のずれが生じる動詞がタイプ1よりも多いということがわかる。また、タイプ1とタイプ2のどちらにも属するような動詞も数多く存在することも明らかである。なぜこのような重複が生じるのか、また、どのような動詞にタイプの重複が見られるのかを説明することは、今後の課題としたい。

タイプ1, 2, 3の動詞から離れて、*with* 付加詞をとる例がBNCで見出されない例を考える。従来の分類では同族の付加詞をとる名詞由来転換動詞として分析されていたにも関わらず、BNCでは *with* 付加詞と共起しなかった名詞由来転換動詞が23語見られた。その他のコーパスで *with* 付加詞をとる動詞が見られるかどうか、及びインフォーマントチェックによって事実観察を深める必要がある。

以上 List C のように、BNC 調査結果に基づき、筆者は Levin (1993) が分析した名詞由来転換動詞をタイプ1, 2, 3の3つに下位分類した。Levin (1993) の分析は、同族 *with* 付加詞をとる名詞由来転換動詞の109語全てを列挙しているだけで終わっていた。しかし、これらを主に3つのタイプに分類できるという結果より、その動詞を List C のようにさらに細かく分類し続ける必要がある。まだ調査できていない残りの名詞由来転換動詞42語を分析し、List C の分類を完成させることも今後の課題としたい。

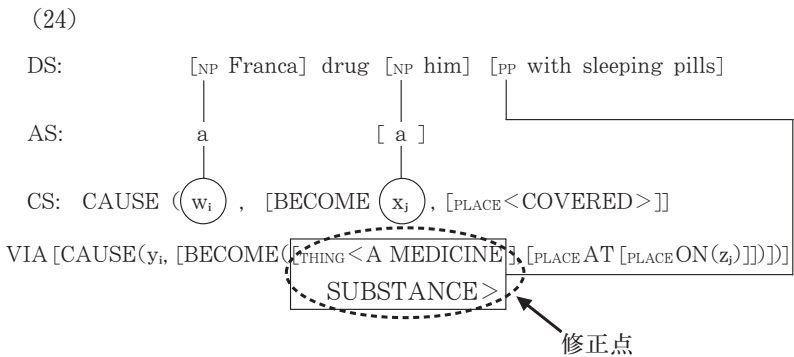
### 3.4. Randall (2010) の lexical entry の修正

セクション3.2と3.3のデータ分析より、同族 *with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞には3つのタイプがあるということがわかった。この結果により、Randall (2010: 110) が示した名詞由来転換動詞の lexical



entry の構造を改善する必要があると考えられる。ここでは、セクション3.2で見てきた分析に基づき、同族 *with* 付加詞をとる名詞由来転換動詞に関する新しい lexical entry を考える。

まず初めに、同族 *with* 付加詞をとることができると思われるタイプ1の動詞を考える。ここでは、3.2の(12)で見られた動詞 *drug* を例として使う。(12)の動詞 *drug* の lexical entry は、(24)のようになると考えられる。



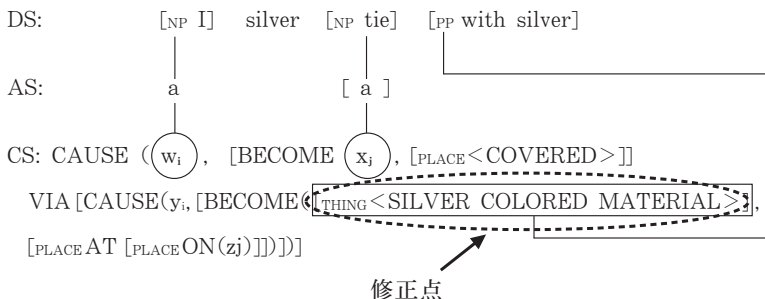
Randall (2010: 110) は動詞 *butter* を例に挙げ、*with* 付加詞は <A BUTTARY SUBSTANCE> という選択制限を持っていると分析している。動詞 *drug* は動詞 *butter* と同じタイプ1に属しているため、Randall (2010) に従っている。動詞 *drug* の lexical entry を(24)のように考えると、Randall (2010) に従っていると言える。但し、1つだけ修正している。*with* 付加詞の選択制限を <A MEDICINE SUBSTANCE> とする。(24)のように選択制限を通して、動詞 *drug* は付加詞 *with sleeping pills* をとることができると考えられる。

次にタイプ2について見ていく。タイプ2の動詞は、同族 *with* 付加詞を持たず、意味の拡張が見られるという特徴がある。例えば、3.2の(16)の動詞 *pepper* がそのタイプに入る。(16)の意味分析より、この

タイプに相当する lexical entry には、「胡椒を撒くように」という意味拡張を示す意味構造が含まれていると考えられる。しかし、この意味拡張の部分をもどのようにCSと対応できるのかどうかは検証できない。また Kiparsky (1997) によると、タイプ2のような動詞には bleaching が見られ、元の名詞の意味が弱まり、後に続く前置詞句内で元の名詞がそのままでは使われないという現象を示している。Kiparsky (1997) は bleaching が生じる名詞由来転換動詞の具体例を挙げているが、それらの動詞がどのような意味構造を持つのかということを表していない。したがって、タイプ2に見られる意味の拡張部分をどのようにしてCSで表すのかは、今後の課題としたい。

最後に、タイプ3について見ていく。3.2の(22)の動詞 *silver* のように、*with* 付加詞が表すものは本来の名詞の意味ではなく、その名詞を使った素材を示し、従来の同族の付加詞を持つ名詞由来転換動詞の意味とのずれが生じるものがある。(22)の分析を使うと、このタイプに当てはまる lexical entry は(25)のようになると考えられる。

(25)



Randall (2010: 110) は同族 *with* 付加詞をとる名詞由来転換動詞の例として動詞 *butter* の lexical entry を示している。その lexical entry の中で、動詞 *butter* の *with* 付加詞は <A BUTTARY SUBSTANCE> という選択制限があるとされる。(22)の意味分析より、動詞 *silver* が持つ選

択制限には、「銀色の物質や素材」という意味が含まれていると考えられる。よって、この選択制限は<A SILVER COLORED MATERIAL>に変えるべきである。動詞 *silver* が (25) のような lexical entry を持てば、*I silver tie with silver.* という文が「ネクタイを銀の繊維で裏塗する」という自然な解釈が得られる。

同族 *with* 付加詞を持つ名詞由来転換動詞は 3 つのタイプに分けられるとなると、以上のように lexical entry の中の意味構造も変わってくるということになる。したがって、Randall (2010) の分析は、この点で修正される必要がある。

#### 4. 結び

名詞由来転換動詞は、同族 *with* 付加詞をとることができる。その特徴を持つ動詞として分析されてきた転換動詞の中には、元の名詞の意味を弱めながら、*with* 付加詞を用いて意味を拡張させるものがある。BNC で収集したデータを意味分析すると、同族 *with* 付加詞を持つとされる名詞由来転換動詞はタイプ 1, 2, 3 の 3 つに下位分類することができる。タイプ 1 は従来の分析の通り、同族 *with* 付加詞をとる名詞由来転換動詞であり、タイプ 2 とタイプ 3 は意味の拡張が見られる名詞由来転換動詞である。タイプ 2 は同族の *with* 付加詞は持たず、意味の拡張が見られるものであり、Kiparsky (1997) の bleaching が起こる。一方、タイプ 3 は *with* 付加詞の名詞が本来の意味ではなく、その名詞の素材を示している。この分析より、同族 *with* 付加詞をとる名詞由来転換動詞を下位分類する必要がある。そして、Randall (2010) が示した意味と統語の一致より、名詞由来転換動詞にとって、lexical entry の意味情報は動詞に後続する統語情報を決めるために必要である。つまり、Randall (2010) が示している CS のような意味構造が、動詞の後に置かれる要素を確立している。

吾

しかし、Randall の lexical entry にも欠点があり、動詞の中には、動

詞句全体の意味に合うような幾つかの lexical entry を必要とするものもある。そして、タイプ2に属する動詞は lexical entry の中でどのようなCSを持つことにより、意味と統語を一致させることができるのかはまだ明らかではない。タイプ2の動詞に関する意味表示を検証することは今後の課題としたい。

また、名詞から動詞への転換がゼロ派生によるプロセスなのか、動詞として再登録されるという relisting によるプロセスなのかという問題が解決されていない。意味拡張が見られる名詞由来転換動詞の存在や Randall (2010) が示している lexical entry の存在により、転換は lexicon の中に再登録されるという考えと関連があるのではないかと考えられる。例えば、タイプ2に当てはまる動詞 *pepper* はまず初めに名詞から動詞へと再登録された後、意味拡張を示す *with* 付加詞をとることができる名詞由来転換動詞として再登録されていると考えられる。しかし、lexicon の中にはどこまでの情報が含まれているのかが明らかではない。転換は relisting による派生プロセスだと考える場合、どのように意味情報が貯蔵され、同族 *with* 付加詞を持つことができる名詞由来転換動詞、あるいは、同族付加詞を持たず意味の拡張が生じる名詞由来転換動詞を形成していくのかを今後検証したい。

[注]

\* 本稿では、筆者の修士論文“The Complements of Verbs in Simple Sentences: Implicit Argument Verbs and Denominal Conversion Verbs”で扱った名詞由来転換動詞の分析のみを取り扱い、修正したことを述べている。

1) Plag (2003: 115) は「転換動詞は lexical であり、non-syntactic な特質を示す」と考えている。例えば、(a) のような文が見られる。

兎

(a) Jenny wintered in Spain. (Plag (2003: 114))

(a) のように *winter* は名詞由来転換動詞としても使われる。とこ

ろが, *winter* と同じ季節を表す *spring* や *autumn* は動詞として使うと完全におかしいとされている。この事例から, どの種の名詞が動詞に転換されるのかは明らかになっていない。この観点から, Plag は形態的特徴が重要だと考えている。

2) *With*-theme Adjunct Rule は以下のように定義されている。

Given the configuration [VP V... [PP with NP]] if the verb's CS contains

[... BE (COME) ([THING], [PLACE])], then the CS of the NP may fuse with THING. (Randall (2010: 103))

## 参考図書

Adams, Valerie (2001) *Complex Words in English*, Longman Press, London.

Bierwisch, Manfred (1967) "Some Semantic Universals of German Adjectivals," *Foundations of Language* 3, 1-36.

Clark, Eve V. and Herbert H. Clark (1979) "When Nouns Surface as Verbs," *Language* 55, 767-811.

Hale, Ken and Keyser, Samuel Jay (2002) *Prolegomenon to a Theory of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.

Kiparsky, Paul (1997) "Remarks on Denominal Verbs," *Argument Structure*, ed. by Alex Alsina, Joan Bresnan, and Peter Sells, 473-499, CLSI Publications, Stanford.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, The University of Chicago Press, Chicago.

Lieber, Rochelle (2005) "English Word-Formation Process: Observations, Issues, and Thoughts on Future Research," *Handbook of Word-Formation*, ed. by Pavol Štekauer and Rochelle Lieber, 375-427, Springer, Dordrecht.

哭

- Plag, Ingo (2003) *Word-Formation in English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman Press, London.
- Randall, Janet H. (2010) *Linking: The Geometry of Argument Structure*, Springer, London.